



[野菜部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

3. 夏秋露地栽培におけるキュウリ褐斑病の耐病性新品種の有効性

[要約]

夏秋露地栽培におけるキュウリ褐斑病の耐病性新品種「SR22」、「OF121」及び「艶香」は、慣行の耐病性品種より強く、ブルームレス台木への接ぎ木苗においても発病が低く抑えられる。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 病虫研究室

[連絡先] 電話086-955-0543

[分類] 情報

[背景・ねらい]

従来の夏秋露地栽培におけるキュウリ褐斑病耐病性品種は、褐斑病の発生を確実に抑制することは難しい。そこで、近年開発された耐病性新品種のキュウリ褐斑病防除対策における有効性を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 夏秋露地栽培キュウリのブルームレス台木への接ぎ木苗を用いたポット試験において耐病性新品種の「SR22」、「OF121」及び「艶香」は、慣行耐病性品種より病斑形成数が少ない（図1）。
2. 慣行耐病性品種のブルームレス台木への接ぎ木苗は、自根苗と比較して褐斑病の発生が多い。しかし、「SR22」は接ぎ木苗においても発生が少ない（図2）。
3. 現地試験において、「SR22」は慣行品種と比較して年次変動がなく安定して耐病性が強く、「OF121」、「艶香」の耐病性も比較的安定している（表1）。
4. 「SR22」、「OF121」及び「艶香」は初発生が慣行品種より遅いものの、初発生後の病勢進展は慣行品種と差がみられない（平成27年度試験研究主要成果参照）。

[成果の活用面・留意点]

1. 褐斑病に耐病性を持つ品種であっても炭疽病、べと病は発生するので、これら病害に対して適切に防除する。



[具体的データ]

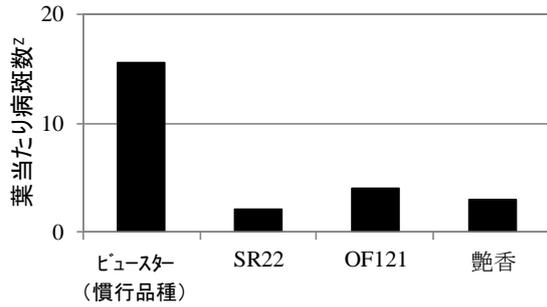


図1 耐病性品種の褐斑病耐病性品種比較（ポット試験）
 注）ブルームレス台木への接ぎ木苗を使用した
²各品種について行った2回試験の平均値
 1試験当たり3株供試し、1株当たり3葉の病斑数を調査
 葉あたり病斑数を算出

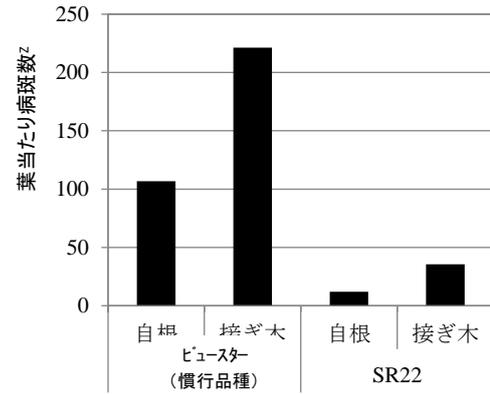


図2 品種及び接ぎ木の有無が褐斑病の発病に及ぼす影響（ポット試験）
²5回試験の平均値
 1試験当たり4～5株供試
 1株当たり3～4葉の病斑数を調査

表1 圃場試験による各品種の褐斑病耐病性の評価²

年度	圃場(定植時期)	品種名		
		SR22	OF121	艶香
平成26年	久米南町 現地A圃場 (6月上旬)	◎	—	—
	久米南町 現地B圃場 (6月下旬)	◎	△	△
	久米南町 現地C圃場 (8月上旬)	◎	◎	—
平成27年	久米南町 現地C圃場 (6月上旬)	◎	◎	◎
	久米南町 現地D圃場 (7月上旬)	◎	—	—
平成28年	久米南町 現地C圃場 (6月上旬)	—	—	◎
	津山市 現地E圃場 (5月下旬～6月中旬)	◎	—	—
	赤磐市 所内圃場 (8月中旬)	—	◎	◎
まとめ		◎	△～◎	△～◎

◎:慣行品種より発病推移が低い、またはSR22と同様に発病が推移した品種を強い耐病性と判定

△:慣行品種と同様の発病推移で同程度の耐病性と判定

—:データなし

注)ブルームレス台木に接ぎ木した苗を使用、空欄はデータなし

²各品種2から4か所の発病度を調査し比較した。

発病度={ (4E+3D+2C+1B+0A) / 4N } × 100 N:調査葉数

A:発病が認められない B:発病が3病斑/葉以下

C:病斑が4病斑/葉以上～病斑面積1/4未満 D:病斑面積が1/4～1/2 D:病斑面積が1/2～枯死

[その他]

研究課題名：キュウリ褐斑病の多発要因の解明による総合防除技術の開発

予算区分：交付金

研究期間：2015～2017年度

研究担当者：畔柳泰典、矢尾幸世

関連情報等：[平成27年度試験研究主要成果、71-72](#)